

令和6年10月

◆久松久子 選 ～思ひ出の一句～

「爽風をのせて発車オーライ」

バスでもタクシーでも、降りる時に運転手にお礼を言う人をほとんど見かけなくなった。そんな昨今、「ありがとうございます」と大きな声で深々と頭を下げる少年がいる。いつもバスの一番前に席を取り、首に定期券を下げて、手すりのパイプをしかと握り前方を見つめている。その眼差しは、あたかも自分が運転しているかのような真剣さである。余程バスが好きと見えて、曲がり角に来ると「曲がりまーす。御注意くださーい」と客席に向かって声を張り上げる。

その少年は、どうも知的な障害をもっているらしいが、その瞳の清らかなこと。昨今の歪んだ世相に、一陣の爽やかな風を吹き込んでくれる。きっと親御さんは心根の優しい、丁寧に躰をされる方なのだろう。少年の背後に親御さんの人となりが見える。

私はある日、この少年を見習うべきだったと気づき、初めて運転手にお礼を言って降りた。そしてこのことがきっかけで、食堂を出る時も「御馳走様でした」が素直に出るようになった。一人の少年から大切な礼儀を訓えられ、知らない人との心の輪が広がり豊かな関係を築ける愉しみを覚えたのである。

一陣の爽風めぐる市バスかな 久子

「女心」

その昔、天下の二枚目と言えば、あの切れ長の眼の俳優、長谷川一夫だった。側へなど、まあ一生かかっても近寄れない方に、なんと御目にかかったことが

ある。しかも至近距離、間近にですぞ。

見たのは、私の育った茨城県の小さな町の駅前だった。宝井馬琴の選挙の応援演説に来ていたのだった。田舎のことで、選挙に関心もなかった頃である。集まったのは、当時、十五歳の私を入れても五人程だった。今でもあの艶めかしい切れ長の目元を忘れることはできない。選挙巡りで日焼けをしたのか、お化粧焼けなのか、浅黒くて大きな目鼻立ちのはっきりしたお顔は、流石、日本一の大役者と子どもながらもうっとりした。

何を隠そう、私の母は長谷川一夫の熱狂的なファンだった。林長二郎という芸名だった頃のプロマイドを百枚以上は持っていたそうな。女学校の卒業旅行で京都に行った折、友達と二人でこっそり抜け出して、大覚寺近くの長二郎の家まで行って先生に叱られた話を何度も聞かされた。

また、近所に「みよし館」という座布団を持参して観に行く映画館ができ、そこでは長谷川一夫の名前で出演した映画が上映された。母は店の仕事が忙しくても、何かと私のことで理由をつけては映画を観に行った。そして、クライマックスのところで「呉服屋の若おかみさん！ 番頭さんが迎えに来てますよー」と大きな声で呼び出され、観客に振り向かれながら、座布団を抱えて帰ることもしばしばだった。

家に帰ると、当然ながら父は「忙しいのに何してるんだ」と叱り、母は肝心なところで連れ戻されたので大ふくれ。そういうことが何度もあってよく喧嘩をしていたが、母はいつも開き直っていた。

それほど熱心なファンだったのに、その憧れのスターがすぐ近くの駅前に来ているというのに、母は「恥ずかしくて行かれない」と言ったのだった。

女心というものは、年齢には関係ないものらしい。母の命日の十月三日にな

ると、いつもこのエピソードを思い出す。

ときめきは老いてもありて照紅葉 久子

「弁士になりたかった母」

私達姉妹の幼い頃は、寝物語に歴史に残る人物の武勇伝や怪談を、母が講談師さながら熱の入った話し振りで聞かせてくれた。お陰で皆、歴史好きになった。私は四十年前から俳句の道に入ったが、吟行の度に母が語ってくれた話が甦って、句作の助けになった。

私の娘も歴史が好きで、高校生の時に京都の壬生の新撰組研究会に入った。土方歳三の足跡を調べに北海道へ十回以上行き、仲間の一人と『歳三と往く』という本を出版したほどだった。

函館の五稜郭祭では、俳優の栗塚旭氏が歳三役になり、娘が歳三の恋人おゆきに扮して出演したこともあった。これはテレビでも放映されて、後日、函館のテレビ局から録画を届けていただいた。この時の娘の衣装の着物は、母が新婚旅行に来たものだったので、母には二重の喜びだった。

この映像を観て間もなく、母は亡くなった。亡くなる少し前に「もしあの世に行ったらどんな幽霊になって会いにきてくれる？」と尋ねたことがあった。母は「螢になるから怖くないよ」と笑った。

導きってくれし光か秋螢 久子